

招待席

# 杉浦伊作

すぎうら いさく 詩人。1902（明治35）年8月28日～1953（昭和28）年5月14日。愛知県渥美郡福江町生まれ。詩作を始めた当初はロマンチックな詩風で、抒情詩集『豌豆になった女』（1929（昭和4）年刊）を出版した。その後はリアリズムの世界に入り、散文詩集『半島の歴史』（1939（昭和14）年刊）等も出版。戦後、第1、第2詩集から選んだ詩に加えて、エッセイ・小説等を収めた詩文集『人生旅情』（1948（昭和23）年刊）を出版した。また、浅井十三郎・北川冬彦らと「現代詩」の創刊に尽力、詩壇の戦後復興に貢献した。掲載作は、1939（昭和14）年刊行の『半島の歴史』から抄録する。下層階級への愛情や社会批判を読み取ることができよう。底本は、『日本現代詩大系』（1951（昭和26）年、河出書房刊）第10巻に依った。なお、差別的な表現が見受けられるが、歴史的作品なので、ママとした。

## 『半島の歴史』抄

### 《目次》

#### 半島の歴史

ポートルート — PAUL WOLF の作品 —  
峠  
孤貧 — A Widow —

#### 半島の歴史

半島にひとつの入江がある。山につゝじの咲くころ。若葉のむげにかほり。水苔のあたりぜんまいがひらき。こがく

れに入江がのぞく。白い帆船の水脈をひいて。

入江に測量のはたがひらめいた――。

トロツコが終日山からくんだり。埋立地に土工のむれがひしめきひしめいた。

海の中に何万町歩の水田をゆめみる地主。

日傭の金に海をおしげもなく埋める村人。

海を奪はれ生活にあえぐ漁師。

村はまんぢにあけくれた。

よごと、銘酒屋に、島田くづしのぢごくが若い衆のふところをねらふ。

娘がつぎつぎにて、なしごを生んだ。

工事なかばに、測量技師が人妻と駆け落ちし。つぎつぎに不正が露れ。村の分限者がばたばたと、没落した。

壊れたトロツコのそばに月見草が咲いた。

それから――。

いくとせ――。

山につゝじの咲くころ。若葉のむげにかほり。水苔のあたり。ぜんまいを摘む。いくたりかので、なし児が入江を見下してゐる。

――つかれた村の向ふに入江が浅くにごつてゐる。

## ポトレート

### ― PAUL WOLF の作品 ―

君の帽子にはヒサシがない。

君の帽子は地下水に汚れてゐる。

陽のめを見ないで腐される帽子のよごれめは想像できないものがある。

君のひたひのしわは地球の皺のやうに溝が深い。

君のひたひのしわには、廃坑の汚水がたまつてゐる。

羚羊かもしかの耳のやうな両開きの扉に君の宿命がある。

たえず地球のぢなりに怯え、――くらがりで動きださうとする耳。

君の過去に幾百幾千のな、かまが、うめきながらこの扉の中に消えて行つた怯え。  
あゝ耳は君の恐怖のバロメーター

世紀の塵を払ふ銀線の下に君のおちこんだ眼がんきゅう球がある。

目、目、明るいものを見る目ではない。

くらがりに地球の年輪をかぞへる目

層の下に層があり、そこに蠢く人間どもを見るだけの目。

君の目は、地下のくらがりに通ずる脈。

呪詛にのみ開く三白眼。

呪つてもやまないものを呪つてゐる目。

その方向に敵がある。

発掘された土器のやうに汚れてゐる鼻。

地すべり。倒壊。君の過去がすりむけてゐる。

死んだ男の爪でひつかいた最後の記録が読めない君の両頬の皺。

口は閉るためにある意志力。

最後の叫びにのみ開く坑道。

それでゐて、君の過去を、雄弁にサウンドする。

君の髭は鼻孔を吸つてきたなく白い。

白いもののきたならしさをしらしめる君の髭ほひげ。

深い溪谷をかくしてゐる嶺のやうに、画然とした輪郭の頤の下に、君の生命の地下水

が逆流してゐる。

土管のやうに君の首はかつ色に汚れ、破衣の上にある。

破衣は貝殻のボタンで首根をしめ。

破衣は君の肩、馬の腹帯のやうなバンドで釣られ。このズボン吊りの下に、君の家族

がぶらさがつてゐる。

炭坑夫——。

君の最後のポートレートが、倒壊した炭坑の発掘された土砂の中から発見された。

## 峠

馬車がそこまできると御者はいつものやうに、鞭を持つ

たまゝ跳び下りた。「すまんが、おりてくらつさい。この

峠を越すには、あんさんがたが、乗つていちや、馬が可哀想で」馬だけが、びつしよりと汗をかいて、喘ぎ喘ぎ登った坂だけに、ひとびとはほつとして、いきぎよく馬車から下りた。

馬はガツガツと羊腸たる山径を登つた。

展かれた限界。俯瞰する溪谷。湯女の招く温泉村。人々は展望に涼を入れた。

馬が道路のまん中で、気持よきそに放尿いばりした。ホップくさいあぶく、急激に坂を下つて流れ。しぶきが四散した。「あれ、こんちきしよう。いきすかんでも」乗合の酌婦せんなが、すといきような声で叫んだ。「いきすくやうなでかいのではないか」——誰やら、旅のひとがからかった。「あらやーだ。このしとなにをいふのやら」みだらな応酬にすばやく、今宵の客を釣る。

「さあ、乗つて貰ふべいか」御者は、ひとびとをうながし、——かつての日、この峠を泣いて下つたあの娘が、もう、あんなにたつしやになつたか——と感心しつゝ一鞭いれた。

馬はいつさんに坂を下つて駈け出した。

尾根から尾根をガラスのやうな、澄みきつた空に、轍わだちの音がきんきんと山彦こだまして行つた。

## 孤貧 — A Widow —

そこには都会の路次が眠つてゐた。嘘のやうに眠つてゐる。路次の両側に家々が眠つてゐる。

喰ひ足りないで泣いて眠つた子供の姿は淋しいものである。母は夜だけ安堵した。たとへ貧ひんが川さかのぼるうしほを遡流潮のやうにひしひしと迫つてきても、どこの家々もしめし合せたやうに、夜は眠つてしまふからである。

工場ですりむいた指先の傷口がうずいた。

母は破れた子供の靴下の穴を毛糸で編む。

母親の着物の裾に深い夜気がしのびこむ、冷え冷えとしのびこむ。

隣のラヂオ・ニュースは海の底の物音のやうにときどぎ、ききとりにくくなることもある。それでゐて、隣のラヂオにききみゝたてるのは、底冷えのせいではない。

誰しも、一度、驚愕に値する報は二度と聴きたくない。

聴きたくないのに、聴かないでゐられないのは、ニュースにおびえてゐるからである。

おひつくらうことの出来ない、いたましさに、糸の針の先がうごかないでゐた。

うづく、血のしみた繃帯の指先に、世界の端のある街の砲声をかんじ。

母はひよつとすると、今宵もまた眠れないではないかと思ふた。

Sugiura Isaku

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Jul 1, 2009

